

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02075

研究課題名(和文)近代日本における美意識の変容と文化的越境

研究課題名(英文)The Transformation of Aesthetics and its Cultural Border-crossing in Modern Japan

研究代表者

イ ヨンスク(lee, yeounsuk)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授

研究者番号：00232108

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：近代日本における美意識の変容と文化的越境を東アジアを視野に入れて研究を進めた。とりわけ近代日本と朝鮮にどのような近代美学が創出されたかに注目した。その成果は2016年度3月にシアトルで開催されたアジア学会年次大会、2016年8月のプノンペンのワン・アジア・コンベンション、2017年6月のAAS in Asia Conference、2018年3月にローマ大学で学会発表をした。また2017年5月にはアメリカ、韓国、中国からの研究者と国際シンポジウムを開催し、その成果を『言語社会』12号に掲載した。こうした研究を通して伝統的美意識とモダニティの対立のあり方の類似点と相違点を理解することができた。

研究成果の概要(英文)：I have explored how aesthetic ideas and values were transformed in modern Japan from a perspective of cultural border-crossing with a particular attention to the emergence of modern aesthetics in modern Japan and Korea. The research results from this research project were presented at the One Asia Convention held in Phnom penh of Cambodia in August 2016, at the Annual Association of Asian Studies Conference held in Seattle in the United States in March 2017, and at the conference held at Sapienza University of Rome in March 2018. In 2017 I organized an international symposium at Hitotsubashi University and the papers presented at this symposium, including my own, were later published at the journal of "Gengo shakai", vol. 12. I was able to understand the similarities and differences in the mode of confrontation between traditional aesthetics and modernity through this research.

研究分野：社会言語学、文化研究

キーワード：文化的越境 美意識の変容 帝国とモダニズム

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで近代日本における天皇の詔勅の意味、近代日本における共同体主義とナショナリズムの関係、言語様式の観点からみた文化的越境の問題などを明らかにした。とくに、「近代日本における言語様式の重層性と文化的越境の研究」においては、言語だけでなく文学や芸術をも視野に入れ、文化研究的な方向付けを強めてきた。

また、国境を渡った知識人や芸術家の足跡を追うことで、近代日本において文化的越境が多様な意味をもっていたことを把握することができた。

こうした一連の研究を通してわかってきたのは、近代日本のナショナリズムの展開のなかで、美をめぐる問題系がきわめて重要な意味を担うということであった。たとえば、ナショナルな意識は政治的な次元において語れるだけでなく、「日本的な美意識」の様式のもとで審美的な次元で理解されることが多かった。つまり「日本」そのものが「美」の理念として把握することができる。このような問題意識をもって本研究を進めることとした。

2. 研究の目的

近代日本のナショナリズムの特徴のひとつは、美に対する意識が政治思想に独特の陰影をもたらしたことである。現実とは別の次元を開示することによって、美は現実の矛盾を乗り越える回路として把握された。そして美は個を全体へと融合させる契機となり、共同体にある種の高揚感を授けるものとされた。

その一方で、モダニズムやアバンギャルドなど、近代性(モダニティ)を標榜する芸術運動、思想運動は、伝統的な美意識からの決別を図り、独自の美の理念を対峙させた。しかし、そうした運動においても、現実意識が希薄になるにつれて、日本的美への回帰がなされるようになる。

この研究では、近代日本における美意識の変容を取り上げ、その思想史的意味を論じる。そして、ナショナルな枠組みへの統合とそこから離脱という視点から、近代日本における文化的越境の問題を考察する。

具体的な考察対象としては、以下のものを考えた。1)日本の伝統的美意識と近代性の関係、2)近代日本における美の政治性、3)美の越境

3. 研究の方法

本研究では主に文献資料を用いる。刊行物だけでなく、未刊行・未公開の資料を積極的に発掘し利用していく。一人の知識人に焦点を定めるのではなく、ひとつのテーマに関係する複数の知識人を常に比較対照すること

によって、テーマ系そのものの意味の変化を追及するという方法を取る。

時代的には、近代日本を網羅的に概括するのではなく、顕著な特徴が出現した時期、あるいは新たな文化・社会の枠組みが出現した時期に焦点を定める。

最も重視するのは、日本にモダニズムが輸入され、しだいに日本独自のモダニズムが形成されていった時期である。文化的越境についても、やはりモダニズムないしアバンギャルドとの関係を重視する。日本の内部においては、モダニズム的美意識が無力化し、戦争のディスコースのなかに吸収されていった過程を取り上げる。

日本の外部においては、モダニズムに基づく反西欧的美学が「日本」の美意識と共振するに至った過程を取り上げる。こうした方法を取ることで、それぞれの現象の根底にある、伝統的美意識とモダニティの対あり方の類似点と相違点を理解することができる。

4. 研究成果

2015年度においては、まず日本の伝統的美意識の枠組みがどのように成立したかを考察した後に、それに対するモダニズムの挑戦のあり方を考察することを予定していた。しかし、研究を進めるうちに、美意識の問題の底にある国民意識の問題、とりわけ民俗学的にとらえられた国民意識の問題を考察する必要に迫られた。なぜなら、美意識は結局のところ「国民」の当為のひとつの形式として成立することがわかったからである。

韓国の延世大学に招聘されて行った講演「言語が開く<日本>という空間 柳田国男と折口信夫の場合」は、まさにこの問題に取り組んだ研究の成果である。この講演では、柳田国男と折口信夫という近代日本を代表する二人の民俗学者が、どのように「日本」という空間を想像していたかを、かれらの著作を貫く「言語」への眼差しから追究したものである。その結果、このような「国民」を作り上げる言語空間が、近代の「美」の前提にあったことが明らかとなった。さらに美意識とは、現実に生じる感情や情動ではなく、むしろ規範としての<美>の理念を指すことであることがわかった。この講演を通じて韓国の研究者との真摯な議論を行い、日本の言語空間の創設が近代朝鮮の言語空間の形成にどのような影響を与えたのかを考察した。この発表と議論を通じて、<近代日本の朝鮮の美意識の変容>の根幹になる可能性を見出すことができた。

伝統的美意識に対するモダニズムの挑戦については、近代朝鮮の最も優れたモダニズムの舞踏家である崔承喜における美意識と民族意識との交錯の問題を追究した。崔承喜(1911-1969)は、<帝国・植民地主義・冷戦>という激動の時代を生きた人物である。崔承喜は日本の代表的な近代舞踏家石井漠からダンダンスを学ぶが、このふたりの関係は<

帝国・植民地主義・冷戦>と<身体と美意識>を読み解く重要な鍵となることがわった。

その成果は、2016年3月31日から4月3日までアメリカのシアトルで開かれた2016年アジア学会年次大会で発表した。この発表では、崔承喜の舞踏がモダニズムの流れにありながら、日本と朝鮮、民族性と近代性などさまざまな相克のなかから作り上げられていったことを明らかにした。

平成28年度は近代東アジア、とりわけ近代日本と朝鮮にどのような近代美学が創出されたかに注目した。その成果は、平成28年3月31日から4月3日までアメリカのシアトルで開催された2016年アジア学会年次大会において、“Choi Sunghui(1911-1969): A Korean Dancer of Diaspora in the Crossroad of Modernity, Ethnicity, and Cold-war”と題して発表した。そこでは、まず植民地朝鮮でどのように宗主国日本からモダニズムが受容されたのかという問いを立て、植民地主義と日本のロマン主義のアンビバレントな交差と相克を分析した。その発表の場の議論を通じて、日本と朝鮮だけではなく、中国、台湾とも<モダニズムと身体感覚の変容>に密接な関係があることを発見した。

平成28年8月5日、6日にカンボジアのプノンペンで開催された「ワン・アジア・コンベンション」では、崔承喜と彼女のモダンダンスの師匠である石井漠の作品をModernityとEthnicityの観点から分析した。この発表では、<美の政治性>のみならず実際の身体の具体的な動きに注目した。

「近代日本と朝鮮における美意識の変容と文化的越境」の課題を進める中で、「帝国」という政治的、地理的、文化的装置が根幹にあることを再確認した。

平成29年3月20日(月)、21日(火)、22日(水)の三日間にわたって、アメリカのUCLAで開かれた国際シンポジウム“Empire of Others”はまさに<帝国・近代・他者・感性>を真摯に議論したシンポジウムだった。研究代表者は言語の観点から、“Language and the ideology of the modern emperor system”と題した発表を行った。この国際学会を通じて<美意識と言語行為>について深く考察することができた。また文学に於ける近代的身体感覚の語り型を見出すことができた。

またこの国際学会ではさまざまな地域からの参加者と新鮮な研究交流ができた点も大きな刺激になった。

文化的越境を現在の視座から、考えてみる作業も試みてみた。その成果は「日本語教育」「多文化共生」「言語とナショナリズム」などのテーマのもとに、学会ないしシンポジウムで発表した。文化的越境においては、言語と身体が重要な柱になる。越境者たちにとっては言語は単なるコミュニケーションの道具のみならず、身体そのものを動かす動力であることをあきらかにした。

その研究成果はイ・ヨンスク(川上郁雄編)

『公共日本語教育学』をくろしお出版で刊行した。この研究成果は言語教育学、文化研究、社会学などの分野でも注目を集めた。

平成29年度は東アジアにおける美意識の変容をDiasporic Modernityの観点から考察した。その成果は2017年6月24日から27日にソウルの高麗大学で開催されたThe 2017 AAS-in-Asia Conferenceで<Bodies in Motion: Dance and East Asia Modernisms Across Borders>のパネルで発表した。会場の参加者からも鋭い質問を受け、研究の新しい展望を切り開くきっかけになったと思う。またこれから国際的な研究交流をしながら、本研究を深めて行く可能性を見出したよい機会に恵まれた。

そのパネルはミシガン大学のEmily Wilcox准教授、ワイ大学のJudy Van Zile名誉教授、多摩大学の講師、國吉和子さん、梁ジョンソン韓国シャマニズム研究所所長がそれぞれ研究発表を行い、東アジアにおける美意識の変容と文化的越境について充実した議論と国際的共同研究の可能性を見出した。そのパネルの発表者は国際的にもそれぞれの分野で優れた業績をおさめた研究者であり、共同研究を予定し研究を深めていくことに意見の一致を見出した。

また2017年5月13日には<東アジアにおける芸術的な想像力とその深層世界>をテーマに国際シンポジウムを主催して、その成果を一橋大学大学院言語社会研究科紀要『言語社会』12号(2018年3月)に掲載した。東アジアにおける近代と美意識の変容について深い考察ができた。このシンポジウムでは理論と実演を通して、東アジアの芸術的な想像力が近代東アジアの近代にもたらした矛盾を乗り越えられる可能性の糸口を発見することができた。

海外における研究成果発表は、2017年11月7日から3日間、中国の南京大学の東アジア大学院生のフォーラムで<越境する身体と文化>の標題でKeynote Speechを行った。東アジアの各地域から参加した若い研究者たちの研究発表にコメントも行った。若い研究者たちと東アジアにおける越境と美意識の変容に関する真摯な討論をした。このシンポジウムを通してこれからの国際的共同研究の展望を見出すことができた。

2017年12月、韓国の全州大学では「近代日本と朝鮮における身体感覚の変容」について発表をし、<帝国と美意識>について韓国と中国の研究者と意見交換をし、東アジアにおける文化研究の新しい視点が得られた。

2018年3月、ローマ大学で行ったThe Third Conference on One Asiaで<The Dancing Body and Colonialism>の標題で発表した。この国際学会ではヨーロッパ、東アジアからの参加者のみならず、インド、東南アジアからの研究者もさまざまな角度から、越境と文化についての研究発表があった。

この国際学会を通じて、地域的な特徴を鮮明に描きだすことができたとともに地域を越えた普遍的側面も発見できた。このような一連の研究成果を遂行することによって、研究代表者の研究の観点を広げることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1 . Yeounsuk LEE, The Early Dance Career of Cho`e Sung hui : A hybrid Path of Chum(Korean Dance) and Muyong (Modern Dance), 『言語社会』12, 2018 年 (pp271-288) 査読無

〔学会発表〕(計 9 件)

1 .Yeounsuk LEE ,The Dancing Body and Colonialism, Third Conference on One Asia in Europe 2018 年 3 月

2. イ・ヨンスク <越境する身体と文化> (keynote speech)東アジア大学院生 Forum 2017 年 11 月

3 .Yeounsuk LEE, “ Bodies in Motion: Dance and East Asia Modernisms Across Borders ” Asia in Asia Conference (ソウル)2017年 6 月

4.Yeounsuk LEE” Language and the ideology of the modern emperor system : Empire of Others in East Asia ” .International Symposium ` Empire of Others, (UCLA) 2017 年 3 月

5.Yeounsuk LEE “ Choi Sunghui (1911-1969): A Korean Dancer of Diaspora in the Crossroad of Modernity, Ethnicity, and Cold-war ” AAS Conference (Seattle) 2016年3月

〔図書〕(計 1 件)

1. イ・ヨンスク(川上郁雄編)『公共日本語教育学』くろしお出版 2017 年 264 ページ (pp.75-95)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

イ ヨンスク (LEE Yeounsuk)

一橋大学・大学院言語社会研究科・教授
研究者番号：00232108